



YAMAGA

近代の山鹿の  
偉人たち  
シリーズ

011

考古学者・教育者（一九二三～一九九四）

# 原口長之

はら

ぐち

なが

し

原口長之は、戦前は小学校、戦後は県立高等学校で教鞭をとるかたわら、考古学クラブの育成に努め、数多くの遺跡や装飾古墳などを調査した。なかでも弁慶ヶ穴古墳の壁画発見は特筆に値する。また、門下の多くが熊本県文化財行政の第一線で活躍した。

会員数千三百人を数えた「熊本史談会」は、郷土史・考古学・歴史学に興味を持つ人の集まりで、編集発行人を務めた会誌『石人』の刊行は、三十五年間、四二二回に及んだ。

昭和五十三年に山鹿市立博物館の初代館長、平成四年に熊本県立装飾古墳館の初代館長に就任。山鹿市史・植木町史のほか、多くの市・町史の編纂委員長などを務めた。

永年の文化財保護などの功績により文化庁長官表彰・熊本県近代文化功労顕彰のほか多くを受賞した。

## おいたち

原口長之は大正二年（一九一三）一月三十日鹿本郡大道村藤井（現山鹿市藤井）で、原口勘吾・イヨの長男として生まれた。四人兄弟の二番目で、長之のほかはみな女性であった。

村の小学校から県立鹿本中学校に進学、ここで名物先生「山嵐」こと、山川甚平先生に出会う。広島高等師範学校を出たの先生は気迫のこもった大声で、大局的な視点から歴史の講義を行った。歴史が好きになった原口少年は、山川先生の獵のお供をしながら厚い人情味を学ぶ。

中学校四年のとき、発熱して髪が抜け、目が見えなくなるといふ大病を患うが、ともかく卒業して治療に励み、やや遅れて熊本師範学校の二部に進学する。ここでも、人生の師を発見する。工藤正人先生（熊本県近代文化功労者）である。肥えたごを担いで、学校農園の手入れをされている姿に接し、その教育実践に強い感銘を受け、友人三人を誘って先生宅で寝食を共にするようになった。この「耕道塾」が、原口を強く育てたと思われる。

昭和九年（一九三四）に師範学校を卒業し、田島小学校（菊



師範学校時代の原口長之



中国にて新婚の原口夫妻

池郡）へ勤務の後、昭和十四年、中国山西省榆次の日本人小学校の校長として赴任。その直前に女子師範出の芳枝夫人（旧姓福川）と結婚していた原口は、新婚早々夫人とともに大陸へ渡り、学校の建設から軍との折衝などに汗を流したが、街頭の市場で見かける古代の文物や、北京原人の化石が出土したことで有名な周口店遺跡の見学などにより次第に考古学への関心を誘っていった。

## 山鹿高校考古学部を創設

原口は昭和十九年に京城帝国大学（現在のソウル特別市）に入るが、翌年終戦を迎え引き上げ船の第一便で帰国する。広島高等師範学校か、併設の広島臨時教員養成所に入るか思案の後、早く卒業できる臨時教員養成所歴史地理科を選んだ。昭和二十三年に卒業して、熊本県立御船高校に赴任する。

翌年郷里の山鹿高校に転勤となり、さっそく考古学部を創設し鹿央町の下原で小児墓棺を発掘した。熊本県内でもすでに玉名高校で田邊哲夫が考古学部を組織して、古閑原貝塚から縄文の粉を

発掘して話題となっていた。

戦後は、神話に代わって考古学が科学的歴史を代表する学問となり、その知識の斬新さで人々から歓迎されていた。

戦前から戦後にかけて、熊本県の代表的考古学者は坂本経堯（菊池西部実業高校）と小林久雄（城南町長もつとめた医師）であった。当時坂本は玉名高校考古学部の指導をしていたが、原口が活動を始めたので山鹿高校考古学部の指導も自らかつて出たという。

原口は昭和二十七年に植木町笹尾の甕棺発掘を実施、続いて同二十九年の馬塚古墳（山鹿市城）発掘調査は山鹿市の協力も得て一週間に及び、鹿本郡市で初めての本格的な発掘調査となった。

現在、馬塚古墳は装飾古墳として県史跡に指定されている。同三十年の臼塚古墳（市指定文化財、山鹿市石）の発掘調査でも、多数の遺物と装飾文様を発見した。

同年十二月には、住宅建設に伴う方保田東原遺跡（山鹿市方保田）の最初の調査を行い、石棺や住居址、大量の土器類などを発見した。その後も方保田東原遺跡では調査が重ねられ、貴重な遺物が数多く出土している。出土品のうち一三九点が県の重要文化財に指定され、弥生時代後期から古墳時代前期に及び県内随一の拠点集落として国史跡に指定され、現在も発掘調査が続けられている。

## 弁慶ケ穴古墳の調査と装飾の発見

原口は昭和三十一年には弁慶ケ穴古墳（山鹿市熊入町）の清掃と実測調査にとりかかった。大正十二年（一九二二）に鹿本郡役所が発行した『鹿本郡誌』に弁慶ケ穴古墳の記述があり、「…石を以て疊める石槨あり、俗に弁慶が穴といふ、入り口の左側に馬の壁畫あり猶内部精査せば新発見すべきものあらん」と記されている。また、山鹿市立八幡小学校に保存されている『昭和九年度



方保田東原遺跡第一次調査 昭和三十年  
原口（右）と筆者（中央）

調「郷土調査」鹿本郡八幡尋常高等小学校刊に「…大正二年内務省より古墳紋章調査に出張の時内部の石に朱にて馬を書きたるを発見したり今古墳を尋ぬる者多し」とも記されているが、昭和になり誰もこの馬の絵を見た人がいなかったため、これを確認するための調査であった。

弁慶ケ穴古墳は長い間、浮浪者のねぐらとなっており石室内部で焚火も行われていたので、天井や内壁など石室全体が真っ黒に煤けていた。這い上がる蚤を殺虫剤で退治しながら、側壁に水をかけて亀の子たわしでゴシゴシとこすった。すると驚いたことに続々と雄大な壁画が姿を現したのである。（筆者は当時山鹿高校考古学部に三年生で参加していた）まさに「精査せば新発見すべきものあらん」だったのである。

「ゴンドラ型の舟が十一艘、馬を載せた舟や柁と考えられる荷物を載せてその上に鳥が止まっている舟もある。赤一色でたつぷりと顔料が滴るほど筆太に描かれた壁画には迫力がある。また、



弁慶ヶ穴古墳の調査に参加したメンバーたち（中央が原口） 昭和三十一年

赤・白・灰色の三色で描いた幾何学文様や、番人を彫刻した人物像なども現れた。弁慶ヶ穴古墳は舟と馬の図柄が多いのが特徴で、装飾古墳の最高傑作とも言える発見であった。これにより、考古学者原口長之の名が全国に知れ渡り、弁慶ヶ穴古墳は昭和三十一年に国史跡に指定された。

熊本県下の装飾古墳は大正時代から学会の注目を浴びていたが、このころは熱気が下火になっていた。それが、弁慶ヶ穴古墳装飾の発見で再び点火されることになった。折から東京大学教授江上波夫の騎馬民族征服王朝説（古墳時代にユーラシアの騎馬民族が

日本列島に入り征服王朝を建てたという説）が発表されて騒然としている中で、それを裏付けるかのような馬の図柄であった。

当時は公費による発掘調査費が殆ど支給されない時代であったから、自治体の教育委員会や大学の考古学教室などよりも、発掘要員を持つ高校の考古学部による発掘調査が多かった。県下では玉名高校と山鹿高校の考古学部が車の両輪として活躍していた。

こんな中で、原口は生徒を人夫代わりに使うことを嫌った。人間的な交流を深めるといふ合宿が持つ精神的な効果を重視し、学問的な雰囲気も与えたいと考え、夜のミーティングに生徒も参加させた。そして、学問的要請と生徒の健康や安全の確保という教育的配慮とが競合するときなどは、指導者の坂本経堯と論争してまで教育を優先した。原口はその後も同三十二年に千田持松石棺群（山鹿市鹿央町）、津袋大塚古墳（山鹿市鹿本町）を調査、同三十三年には上御倉古墳（阿蘇市）でも装飾を発見する。そのほか彼が手掛けた遺跡の調査は数多い。

現在国内で知られている装飾古墳は約六六〇基、九州に約三七〇基と半分以上があり、熊本県が一九六基で第一位、菊池川流域に一一七基が集中しており、第二位の福岡県約七〇基をはるかに超えている。山鹿市には五十一基の装飾古墳があり、市町村単位では日本一の分布を誇っている。

昭和五十一年に熊本県立美術館が開館したとき、熊本県の美術の特色を示す展示として装飾古墳が選ばれ、装飾古墳室が設けられた。また平成四年に県立装飾古墳館が装飾古墳の集中地帯である山鹿市鹿央町に建設されたのも、当然かと思われる。



脚立の上から遺跡を撮影する原口  
(昭和三十年代)

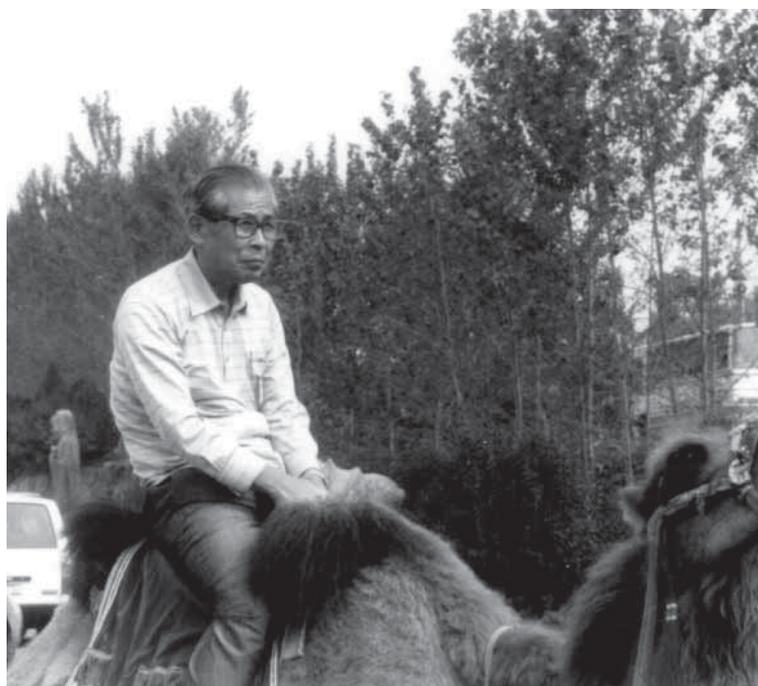
## 熊本史談会と会誌『石人』

昭和三十四年夏、米原長者の遺跡（現鞠智城跡）を見に行つての帰り、山鹿高校の図書室でお茶飲み話に熊本史談会を復活しようということになった。熊本史談会は昭和二十六年に山鹿市杉の日輪寺住職であつた圭室諦成先生の指導で出来ていた会であつたが、先生が熊本女子大学、さらに明治大学の教授として転出され、下火になつていたのである。

史談会では月に一回史跡探訪をして、ガリ版刷りの会誌『石人』を出すことになった。会員は郷土史・考古学・歴史学に興味を持つ人の集まりとなり、続々と会員が増え、地域も広がって、翌年には城北史談会、同四十三年には熊本史談会と改称した。会誌『石人』も三十五年一月から活字印刷となり、三十五年間の長きにわたり、毎月欠かさず刊行されたが、原口の逝去により四二一号で終刊となった。

文化財保護分野における原口の最大の功績はこの「熊本史談会」の運営と『石人』の刊行とにあるといつても過言ではない。月一回の史跡めぐり、勉強会、毎年の旅行、年一回の大懇親会な

どの効果により、投稿者も多く、「研究報告」「ここにこんなものが」とか、「子供に聞かせたい話」や「随想」とか「文芸」そして「会員消息」という内容などで、誰でも投稿しやすかつた。この会の目的は毎号に掲げられた綱領にはつきりしている。埋もれているものを掘りおこし、滅びゆくものを護りつづけ、民族の歩いてきた道を探ろうとする。それは従らに過去をなつかしむだけのものではならぬ。過去もそうであつたように、将来もまたそうであろうとする、たくましく民族の、根柢に培うものでありたい。としよりも若い者も一緒になつて、ことに次の世代を信頼しながら、ひとりびとりが、一握りの力を持ちよつて、作るのが『石人』である。」会員数は千三百人を数えた。この会員が原口長之の総ての事業の応援団であり、エネルギーだった。



熊本史談会のシルクロード旅行にて

## 文化財保護

昭和二十四年法隆寺金堂壁画が焼失するという事件が起こり、文化財保護についての国民の関心が高まって、翌二十五年に文化財保護法が成立した。しかし、市町村段階では積極的な対応は殆どなされていなかった。

そのような中で同二十九年に山鹿市は市制施行、同時に山鹿市文化財保護委員会が設立され、彼はその委員に就任している。原口を中心とした山鹿高校考古学部の活躍が、県下に先駆けてこの体制を生んだのであろう。なお、原口はこの委員を同四十年に熊本県立第二高校へ転出するまで勤めている。

同三十五年には日本考古学協会に推薦され、日本学術会議の選挙権も獲得、考古学者として公認されることになる。同四十一年熊本県文化財専門委員となり、乙益重隆・田邊哲夫とともに専門的調査を担当し、文化庁行政にも発言することとなった。原口は同五十年に熊本県文化財保護審議会委員と改称された後もその職にあつて活躍した。同四十五年、多年の文化財保護活動の実績が認められ、文化庁長官表彰を受賞。(同五十三年には文化庁創設十周年にあつて記念表彰も受けている)

同四十七年、熊本県に文化課が発足することになった。この年熊本県教育庁指導主事を定年退職した原口は、折から仕事が急増した文化課の文化財収蔵庫所長に就任した。文化財収蔵庫は発掘した遺物の整理調査を行い報告書の刊行までを推進するもので、所長を同四十九年まで務め、収蔵庫の業務の基礎を確立した。

翌四十八年、文化課の外郭団体として設立された熊本県文化財保護協会にもその事務局長として要請された。原口は保護協会が単なる外郭団体であることに満足せず、市町村の文化財保護委員

会などの連携のため、自主的な団体として育成するよう尽力した。機関誌『文化財情報』を発行、また報告書の頒布や地方にまで出掛けるの研修会など積極的な活動を展開した。このほかまさに滅び去ろうとしていた肥後琵琶の伝承や、手漉き和紙の技術保存にも意を用いた。

## 山鹿市立博物館の開館と館長就任

山鹿高校考古学部が毎年の発掘調査で集めた遺物は膨大なものになっていった。彼らの熱意と校長の理解によつて学校内に資料室が設置され、優れたその陳列ぶりは全国の高校でも五指に入ると慶応大学の江坂輝弥教授が紹介したほどであった。昭和三十六年二月『石人』の巻頭言で原口が「郷土館がほしい」と書いたのがきっかけとなつて、世論が醸成されていった。翌年に建設期成会



山鹿市立博物館入口の帆足長秋と京の銅像（左）



熊本県立装飾古墳館に寄贈された蔵書約3,800冊

が発足し、山鹿文化財を守る会・石人会員などの熱心な運動の甲斐あって、同五十三年山鹿市郊外の国指定史跡鍋田横穴群と同チブサン古墳との間の台地に、県内で二番目の博物館として開館に漕ぎつけ、原口長之が初代館長として就任した。

山鹿市立博物館では「我が家の自慢展」「戦中戦後生活展」「西南の役展」「帆足長秋(国学者)展」などの企画展を数多く開催し、入館者の増加に努めた。帆足長秋には余程の感銘を受けたのであろう、熊本史談会の二十五年記念事業として博物館の前庭に父娘の銅像を建立し、『国学者帆足長秋と京』という本も刊行された。原口は館長として、肥後を代表する文化財の眼鏡橋や江戸時代の民家を博物館の敷地に移転させて保護した。この鍋田台地は西

南の役の激戦地でもあることから、戦没者慰霊碑も建設した。

## 山鹿市史などの編纂

原口は考古学者であったばかりでなく、古文書も読め、民俗学も分かった。貴重な幅広い学者なのであった。また、熊本県文化財保護行政の核となり、県文化課の中枢として活躍した愛弟子や孫弟子の数が多いため、原口の人間性と魅力を物語っている。学者間に人脈が広く、信頼を集めていた。

折から全国的におこった市町村史編纂のブームの中で、原口は編纂委員長として各地に迎えられた。昭和五十四年に『北部町史』、同五十六年に『植木町史』を完成させ、ともに熊本日日新聞社から出版文化賞を受賞。同五十四年から着手した『山鹿市史』も六〇年に完成して同賞を受賞した。『鹿央町史』を平成元年に完成させ、『三加和町史』『菊鹿町史』『河内町史』『新熊本市史』などにも関連した。

このような広汎な活動に対して、信友社賞(同五十五年)、サントリー地域文化賞(同六十二年)、荒木精之文化賞(平成元年)など数々の賞が贈られ、その賞金をもって『石人』に掲載された「子供に聞かせたい話」を集めた『肥後の民話と伝説』が史談会三十周年記念として出版された。

原口は昭和三十八年から熊本市郊外に住んでいた。新婚早々硝煙漂う中国までお供し、『石人』の編集から、史談会の旅行の世話まで手伝う奥さんとの間に、二男一女を儲け、それぞれ大学教授、高校・中学の先生となり、教育者として独立されている。退職後に自動車の運転免許を取り行動を広げ、ワープロも叩き、年を感じさせない頑張り屋であった。

# 年表 History

大正二年 (一九一三)	鹿本郡大道村藤井で原口勘吾・イヨの長男 (四人兄弟の二番目)として生れる
昭和九年 (一九三四)	熊本師範学校二部卒業・田島小学校に赴任
昭和十四年 (一九三九)	中国山西省榆次小学校校長として赴任 <small>さんせいしやうゆじ</small>
昭和二〇年 (一九四五)	終戦を迎え帰国
昭和二十三年 (一九四八)	広島臨時教員養成所卒業・熊本県立御船高等 学校に赴任
昭和二十四年 (一九四五)	熊本県立山鹿高等学校に転勤 考古学部に創設、下原甕棺調査
昭和二十七年 (一九五二)	南島甕棺(山鹿市)・笹尾甕棺(植木町) 調査
昭和二十九年 (一九五四)	馬塚古墳発掘調査(山鹿市) 山鹿市文化財保護委員会委員に就任
昭和三十〇年 (一九五五)	白塚古墳・方保田東原遺跡発掘調査(山鹿市)
昭和三二年 (一九五七)	弁慶ヶ穴古墳調査(山鹿市)
昭和三三年 (一九五七)	津袋大塚古墳発掘調査(山鹿市鹿本町)
昭和三五五年 (一九六〇)	※以下、発掘調査など多数のため省略 日本考古学協会会員となる
昭和三八八年 (一九六三)	熊本県立鹿本高校に転勤
昭和四十年 (一九六五)	熊本県立第二高等学校に転勤
昭和四二年 (一九六六)	熊本県文化財専門委員(現熊本県文化財保護 審議会委員)に就任
昭和四五年 (一九七〇)	文化庁長官表彰受賞
昭和四七年 (一九七二)	定年退職 熊本県文化財収蔵庫所長に就任(昭和四九年)
昭和四八年 (一九七三)	熊本県文化財保護協会事務局長に就任 肥後琵琶保存会副会長
昭和五〇年 (一九七五)	熊本市文化財保護委員に就任
昭和五三年 (一九七八)	山鹿市立博物館館長に就任 文化庁長官表彰(文化庁創設十周年記念表彰)
昭和五四年 (一九七九)	『飽託郡北部町史』完成(編纂委員長)
昭和五五年 (一九八〇)	熊本日日新聞社賞・信友社賞受賞
昭和五六年 (一九八一)	『植木町史』完成(編纂委員長)
昭和六〇年 (一九八五)	『山鹿市史』完成(編纂委員長)
昭和六二年 (一九八七)	山鹿市立博物館館長を退任
昭和六二年 (一九八七)	サントリー地域文化賞受賞
平成元年 (一九八九)	※以下、町史など、多数のため省略 『鹿央町史』完成(編纂委員長) 荒木精之文化賞受賞
平成四年 (一九九二)	熊本県立装飾古墳館館長に就任
平成六年 (一九九四)	四月、装飾古墳館長を退任
平成七年 (一九九五)	遺族から、考古・歴史関係の蔵書約三八〇〇 冊が県立装飾古墳館へ寄贈された
平成九年 (一九九七)	遺徳をたたえる胸像(ブロンズ製)が、有志六三九名、募金 総額八九四万円により装飾古墳館の敷地内に設置された
平成九年 (一九九七)	遺徳をたたえる胸像(ブロンズ製)が、有志六三九名、募金 総額八九四万円により装飾古墳館の敷地内に設置された

近代の山鹿の偉人たち 011

考古学者・教育者 原口 長之

平成 22 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)

TEL 0968-43-1691

編集委員

前田軍治(山鹿市文化財保護委員)

宮崎歩(山鹿市文化課)

参考文献・ご協力頂いた方(敬称略)

田邊哲夫(1990)『熊本県の近代文化に貢献した人々』熊本県教育委員会

桑原憲彰ほか(1995)『原口長之先生遺徳展』

熊本県立装飾古墳館

桑原憲彰ほか(1997)『原口長之先生を偲ぶ』

原口長之先生胸像建定期成会

上則尚子(原口長之の長女)、国武旭範(表紙写真提供)